原罪 上

P・D・ジェイムズ　青木久恵訳

1629

TOKYO HAYAKAWA BOOKS

HAYAKAWA POCKET MYSTERY BOOKS No. 1629

青木久恵
あおき ひさえ

1966年早稲田大学文学部英文科卒
英米文学翻訳家
訳書
『策謀と欲望』P・D・ジェイムズ
『遺骨』アーロン・エルキンズ
（以上早川書房刊）他多数

この本の型は，縦18.4センチ，横10.6センチのポケット・ブック判です．

検印
廃止

〔原罪〕
〈上〉

1995年12月10日印刷　1995年12月15日発行

著者　P・D・ジェイムズ
訳者　青木久恵
発行者　早川浩
印刷所　星野精版印刷株式会社
表紙印刷　大平舎美術印刷
製本所　株式会社川島製本所

発行所 株式会社 **早川書房**
東京都千代田区神田多町2ノ2
電話 03-3252-3111（大代表）
振替 00160-3-47799

〔乱丁・落丁本は小社制作部宛お送り下さい
送料小社負担にてお取りかえいたします〕

ISBN4-15-001629-1 C0297
Printed and bound in Japan

原罪 上

P・D・ジェイムズ　青木久恵訳

1629

TOKYO HAYAKAWA BOOKS

院图书馆
藏 章

ハヤカワ・ミステリ

629-1 C0297 P1000E

P・D・ジェイムズ

© Stephen Shakeshaft arranged through Elaine Greene Ltd.
© Hayakawa Publishing, Inc.

死体はまるで見世物のようにグロテスクな色をしていた。髪は赤みのある茶色、顔と胴体が不自然なピンク色、上半身は裸で右手には純白のワイシャツを握っている。その上、首には緑色の蛇のぬいぐるみが巻きつけられ、口には蛇の頭が押し込まれていた……。

死んでいたのは名門出版社〈ペヴァレル出版〉の社長ジェラール・エティエンヌだった。何者かに会社の資料室に閉じこめられ、ストーヴの不完全燃焼により一酸化炭素中毒を起こしたのだ。ジェラールは病死した前任者の後を継いで、数カ月前に社長に就任したばかりだった。いったい誰がこんな手の込んだ殺人を仕組んだのか？　そして死体に巻きつけられていた蛇が意味するものは？　現場に駆けつけたダルグリッシュ警視長は、さっそく社員の尋問を開始するが……。

英国推理作家協会賞に四度輝くミステリの女王が、五年ぶりに放つ待望のシリーズ最新作。

Hayakawa Publishing, Inc.

ミステリ

P. D. JAMES

原　　罪

〔上〕

ORIGINAL SIN

P・D・ジェイムズ

青木久恵訳

A HAYAKAWA
POCKET MYSTERY BOOK

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

日本語版翻訳権独占
早 川 書 房
© 1995 Hayakawa Publishing, Inc.

ORIGINAL SIN

by

P. D. JAMES

Copyright © 1994 by
P. D. JAMES

Translated by

HISAE AOKI

First published 1995 in Japan by
HAYAKAWA PUBLISHING, INC.
This book is published in Japan by
arrangement with
GREENE & HEATON LTD.
through TUTTLE-MORI AGENCY, INC., TOKYO.

著者の言葉

この小説はテムズ川を舞台にしています。ロンドンの川を愛する人には馴染みの深い場面や場所が数々出てくるでしょう。ペヴァレル出版と登場人物はすべて著者の想像によるもので、現実の場所あるいは人物とはなんら関係がありません。

目次

第一章　殺人への序文……二
第二章　出版業者の死……一四九

原

罪

〔上〕

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

装幀　勝呂　忠

登場人物

マンディ・プライス……速記タイピスト
ジェラール・エティエンヌ……〈ペヴァレル出版〉会長兼社長
クローディア・エティエンヌ……ジェラールの妹。同役員
ゲイブリエル・ドーンツィ
ジェイムズ・ド・ウィット
フランセス・ペヴァレル
……〈ペヴァレル出版〉役員
ブラキット……秘書
ソニア・クレメンツ……編集主任
シドニー・バートラム……経理部社員
エイミー・ホールデン……広告部社員
ジョージ・コープランド……電話交換係
デマリー……掃除係
ヘンリー・ペヴァレル
ジャン－フィリップ・エティエンヌ
……〈ペヴァレル出版〉もと経営者
フレッド・ボーリング……ランチの船長
スティルゴー卿……政治家
ジョーン・ウィラビー……ブラキットのいとこ
ルパート・ファーロー……作家。ド・ウィットの友人
デクラン・カートライト……クローディアの愛人
ルシンダ・ノリントン……ジェラールの婚約者
エズミ・カーリング……ミステリ作家
ケイト・ミスキン
ダニエル・アーロン
……警部
アダム・ダルグリッシュ……警視長

第一章　殺人への序文

1

新しい職場に人材派遣された速記タイピストが、その初日に死体発見に立ち合うといった例がまるでないとは言わない。だが、業務に伴う危険と見なされるほど頻繁には起きないはずだ。ミセス・クリーリー経営の〈ナンサッチ秘書紹介所〉のピカ一社員、十九歳と二カ月になるマンディ・プライスは、九月十四日火曜日の朝に〈ペヴァレル出版〉の面接に出かけた。しかし新規の仕事にかかる時にいつも感じる不安程度のものしか感じなかった。不安感といってもたいしたことはなく、自分がこれから雇い主になる人の期待に沿えるかというよりも、雇い主の方が自分の希望を満足させてくれるかにあった。この仕事の話を聞いたのは、先週金曜日の六時に給料を受け取りに事務所に寄った時だった。秘書をステイタス・シンボルと考えて、秘書の技能を使うすべをまるで知らない重役の下で退屈な二週間を終えたあとだったから、新しい仕事に乗り気だったし、できれば刺激のある仕事がいいとは思ったものの、これほど刺激的になるとは予想していなかったのではないか。

マンディが働き出して三年になるミセス・クリーリーの紹介所は、ホワイトチャペル・ロードから入った所にある新聞販売店と煙草屋の二階の二部屋にある。ミセス・クリーリーが女子社員や得意先に事あるごとに言うように、シティに行くにしてもドックランズの超高層オフィス・ビルに行くにしても便利な場所だった。これまでのところシティもドックランズも人材の需要はふるわなかったが、他の人材派遣会社が不景気の波を食らって沈没しているのに、ミセス・クリーリーの貯え乏しい小型船はふらつきながらも、まだ浮いていた。派遣の仕事のないスタッフの一人に手伝わせるだけで、ミセス・クリーリーは一人で紹介所を切り盛りしていた。表の部屋が事務所で、そこで得意先に

ごまをすり、入社希望の女の子の面接や翌週の仕事の割当てをする。奥の部屋はミセス・クリーリーの私室だった。賃貸条件を無視して時々泊まり込むのでソファ・ベッドが備えてあり、酒壜を並べたキャビネットや冷蔵庫、開くとミニ・キッチンになる戸棚、大型テレビ、造り物の薪の向こうで赤い光が回転するガス・ストーヴの前には安楽椅子が二脚が置いてある。ミセス・クリーリーはこの部屋を〝憩いの部屋〟と呼んでおり、マンディはその私的空間に入ることを許された数少ない女子社員の一人だった。

マンディが辞めもせずにこの紹介所に勤め続けているのは、この憩いの部屋のせいかもしれない。もっとも本人はそんなものを必要とするのは子供っぽく恥ずかしいことだと思うから、表立って認めはしないだろうが。マンディの母親はマンディが六歳の時に家出した。マンディ自身も十六歳の誕生日を待ちかねるようにして、親の責任とは子供に作らせる一日二回の食事と衣服を与えるだけという観念しかない父親の許を去った。去年マンディはストラットフォード・イーストのテラス・ハウスの一室を貸りて、三人の同年代の友人と何のかのと口喧嘩をしながら共同生活を始めた。悶着の主な原因はマンディがヤマハのバイクを狭い廊下に置くと言ってきかないことにあった。とはいえ彼女にとって家庭のくつろぎ、安心感と言えば、すなわちホワイトチャペル・ロードの〝憩いの部屋〟であり、ワインと持ち帰り（テイクアウト）の中華料理の臭い、ガス・ストーヴのシューシュー鳴る音、奥行きのあるボロ安楽椅子に丸くなって眠ることであった。

シェリー酒の壜を片手に、もう片手にメモ用紙を持ったミセス・クリーリーは、いつものように煙草ホールダーを噛んでいた。ホールダーを口の端に引っかかった、重力に逆らったような格好に落ち着かせると、大きな角縁眼鏡の奥の目を細めて、メモの判読不能に近い文字を眺めた。

「新規のお客さんよ、マンディ、ペヴァレル出版。出版社便覧を調べてみたんだけど、この会社は一七九二年創立で、イギリスの出版社では最古の部類——もしかしたら一番古いのかもしれない。場所はテムズ川沿い。住所はワッピングのイノセント・ウォーク、イノセント・ハウスのペヴァ

レル出版。あなたもグリニッジまで船で下った時にイノセント・ハウスを見たことがあるでしょう。えらくご大層なヴェネツィアの宮殿みたいな建物。この会社はチャリング・クロス桟橋から社員を運んでいるらしくて、ランチを持っているんだけど、ストラットフォードに住んでいるあなたには用なしね。でもあなたの住んでいる側と同じだから、出勤は楽でしょう。タクシーを使った方がいいんじゃないかしらね。タクシー代は仕事が終わった時にちゃんと清算してもらいなさいよ」

「バイクで行くから、問題なしよ」

「ま、好きなようにするといいわ。火曜日の十時に社に来てほしいって」

ミセス・クリーリーは、この格式高い新規の客の場合、ある程度きちんとした服装がのぞましいのではないかと言おうとしたのだが、やめておいた。マンディは仕事や態度のことで注意されても嫌な顔をしないが、自信満々、溢れんばかりの個性の表現であるエキセントリックな、時には異様にも見える創作物に関しては黙っていない。

マンディは質問した。「どうして火曜日なんですか。月曜日は休みなの？」

「私に訊いてもしょうがないわよ。電話してきた女性が火曜日と言っていたとしか答えようがないわ。きっと火曜日にならないとエティエンヌさんが会えないのよ。重役の一人で、あなたに直々面接する人よ。ミス・クローディア・エティエンヌ。必要なことは全部ここに書いておいたわ」

マンディは言った。「それにしてもずいぶん大げさなんですね。なぜボスの面接を受けなくちゃならないのかしら」

「ボスの一人よ。雇う人に関してやかましいんでしょうよ。一番いいのを寄こしてくれということだから、一番いいのを送るわけ。向こうは常勤を探していて、まずは臨時で使ってみようという気なのかもしれない。あなた、そのまま勤める話に乗ったりしないわよね、マンディ、いいわね」

「今までにそんなことしました？」

甘口のシェリー酒の入ったグラスを受け取り、安楽椅子に丸くなって坐り込んだマンディは、メモ用紙に見入った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com